

令和6年度 第1回 丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略推進委員会

日時 令和6年5月31日（金）

10時00分～12時20分

場所 市役所第2庁舎2階ホール

出席者（敬称略・順不同）

○委員：杉岡秀紀会長、八尾由江委員、中川フェテレウォルク委員、畑道雄委員、藤本理恵委員、大木玲子委員、中井昌彦委員、藤井叙人委員、小林芳晴委員、荻野祐一委員

※欠席：大野亮祐委員、赤井俊子委員、荻野博久委員

○丹波市 細見正敏副市長

（事務局）清水ふるさと創造部長、磯崎総合政策課長、荻野総合政策課副課長兼情報政策係長、垣内総合政策課政策係長、村上総合政策課政策係主査

1 開 会

2 副市長あいさつ

3 協議事項

（1）第2期丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略の評価検証について

（2）第3期丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略の骨子について

（事務局説明）

委員：第2期総合戦略の進捗について、ポジティブに評価すると設定したKPIのうち、75%は達成できている。また、人口戦略会議が公表している分析レポートにおける封鎖人口の考え方を確認すると、そこまで悲観的な結果にはなっておらず、社会増は若干改善するなど良い傾向も確認できている。一方で、子育て支援に関するKPIは、3項目で達成困難になっており、施策の質の向上が課題である。第3期総合戦略では、女性やデジタルといった観点が重要であり、時代に合った仕事の環境整備がキーワードになる。現在、総合計画についても策定を進めているが、小・中学校の児童生徒にアンケートを実施したところ、8割は将来丹波市に住む意思を示したものの、高校生は6割を切る結果となり、気になる点である。スマホなどを活用し様々な情報が入ってくることで、都会へのあこがれなどもあり、丹波市が選ばれないまちになっている。

施策について、欧米と比較することが多いが、日本とは成人に対する考え方が異なる

など全てを当てはめることはできない。日本では、大学進学や結婚に至るまでは自宅で生活することがあり、結婚への経済的なハードルになっている。また、日本の少子化対策は子育て対策に偏っており、結婚に至るまでの政策が弱いという課題がある。若者が戻ってくるためには、地域に仕事があるか、魅力的な地域であるのかが重要であることから、危機感を持つために、基本目標の順番を変えることも重要である。

委員：女性の転出が多いため、第3期総合戦略では、女性が住みやすい・働きやすいまちを目指すとする。一方で、第2期総合戦略の評価検証で、「年齢や性別を問わず、働きやすい環境が整っていると感じている市民の割合」が達成見込となっており、矛盾しないか。

事務局：KPIは達成見込であるものの、実際に女性が戻ってきていない現実があり、第3期総合戦略ではその観点で取組を進める必要がある。

委員：豊岡市もなぜ女性が帰ってこないのか把握できていない。本社機能が東京圏にある企業では、賃金上昇やワークライフバランスが進んでいるが、市内企業は進んでいない。まずは女性がなぜ帰ってこないのか把握する必要がある。幸いにも、但馬地域に芸術文化観光専門職大学ができた。320名の学生のうち、女性も相当数おられるため、残ってもらえる取組が必要である。

委員：丹波市において、帰ってこない人の声を把握するために、ふるさと住民制度が活用できる。また、賃金に関する一例として、地方銀行と信用金庫では月給の差が5万円と金額差が大きい。雇われる側としては切実な問題であり、比較した時に選んでもらえる対策が必要である。大学の誘致は難しいが、大学が無いまちでも大学生が溢れるまちはあるため、その仕掛け作りが必要である。

事務局：市外の女性の声を聞くにあたり、ふるさと住民制度を活用し、アンケートを取るなど、施策立案のヒントとしたい。賃金対策については、行政が介入することは難しいものの、市内事業者が元気にならないと丹波市も元気にならないため、児童生徒への市内企業の紹介や就職支援サイトを通した就職支援など側面的な支援を行っていきたい。また、大学生が溢れることで地域が元気になることから、連携している大学により深く関わっていただけるよう第3期総合戦略では重要な視点として取り組みたい。

委員：成果は出ているが、若い女性が帰ってこない要因と2%の女性が帰ってきた要因とその属性を把握することが必要である。男性は、40%帰ってきているが、大半が仕事であると思うため、仕事に関することが目標1でも良いと思う。また、大学生の声を聞くと、地方は遊ぶところもなく、都会へのあこがれを語る学生もいる。地方の魅力に気付いてほしいと考えているが、そのためには一度都会に出ないと分からないこともある。

委員：未婚や戻ってきた方へその原因を確認する必要がある。また、基本目標の順番については、子育ての前に地域に働く場や学ぶ場がある必要があり、順番を変えることに賛

成である。なお、地域の良さを知るきっかけ作りとして、与謝野町では30歳や40歳の成人式を行うなど同年代が出会う機会をつくる取組を行っており、丹波市でも取り組むべきではないか。

事務局：戻ってこられた方についての要因や属性は詳しく分析できておらず、未婚の方も含めて把握は難しいと考えている。また、基本目標について、働きやすい職場は重要な視点であり、加えて地域への愛着も重要であることから、ふるさと学なども引き続き実施していくこととする。

委員：丹後地域で調査を行うと、丹後地域を好きな人は9割程度あり、ふるさと学の効果が出ている。ただし、戻ってきたいと思う割合を確認すると半分程度まで減少することから、ふるさと学を実施しても伸びるものではなく、現実問題として働く場があることが重要である。

委員：女性をターゲットにする場合、就職期か結婚後かでも取組内容が変わる。加えて、男性が結婚後に戻ってくるなど、女性以外の視点も必要である。また、市内の就職を促すため、大学生が丹波市で活動する際に、市内の企業を紹介するなど接点を持つ必要がある。加えて、ミモザ認定制度を受けた企業など、高校生に女性が活躍する企業を紹介する取組が必要である。

委員：女性の上昇婚という言葉がある。これは男女共同参画により、女性の賃金が上昇した結果、より高収入の男性を求めるため、男性はさらに賃金上昇が必要になるという研究がある。

事務局：市内からの転出者だけでなく、新たに市外の方に来ていただくことも重要である。
大学生と市内企業の接点について、大学生が市内で地域貢献している時期を機会と捉えたい。

委員：地方の出身者は都会へ、都会の出身者は地方へと向かう傾向がある。ずっと丹波市に在住することは難しく、転出した人が帰ってきたいと思うことが重要である。また、今の若者は昔と比べて価値観が異なり、一つの事業所に長くとどまる意識は薄い。各事業所として長期的な視点を持って、自社の魅力を伝える必要がある。商工会が開催する起業塾への参加者が増えたことに伴い、移住定住につながっており、移住者がさらに移住者を呼び込むなど人の流れができています。特に大路地区は若い女性が多く、仕掛けがうまく回っており、地域からの働きかけなど、人と人のつながりが重要である。

委員：地方と都会の両方を経験することも重要である。どちらかの二択ではなく、半農半Xという言葉もあるように、どちらでも生活できるなど柔軟な選択ができる環境整備が必要である。丹波篠山市が阪神間に近いこともあり、お試し移住やJRの支援をとおして選ばれている。また、福知山市では、学生が日程や実習先をセレクトできるセレクトインターンシップを行っており、福知山市で働くイメージを徹底的に植え付ける取組を行っており、丹波市でもそのような取組を検討する必要があるのではないかと。

事務局：半公半農は兵庫県でも取り組んでおり、丹波市でもサテライトオフィスの取組を進めている。セレクトインターンシップは企業単体では難しいものの、丹波市でもインターンシップをきっかけとして就職した事案もあり、職場を知ることは重要であると考えている。

委員：丹波市には戻ってくるつもりはなかったが、一時的に丹波市に戻り、Iターンの方と関わりを持ったことがきっかけで結婚し、定住することになった。都会と地方の両方を知れば良いと思うし、こどもたちが帰ってきたいと思えるかは大人がキラキラと楽しんでいる姿を見せることが重要である。また、子育て支援として、不登校のこどもへの対応を含め、様々な選択肢がある教育環境を整えることが重要である。加えて、こどもの時から本物に触れることが重要で、丹波市では「食」であると思う。

委員：ひよんなきっかけが最大のきっかけとなり、丹波市へ移住された理想のパターンである。キーワードは、「かつこいい大人」や本物に触れることである。海士町は高効魅力化を契機として、市外からの転入者が増え、地域活性化につながっており、市内3校の魅力化も重要な取組である。

事務局：様々な選択肢のある教育環境を整えることは重要であり、基本目標1でもそのことは掲げている。不登校のこどもへの対応を含め、一人ひとりに適した学びを提供したいと考えている。

委員：丹波市からアイクレオが撤退するなど、働き手の確保も重要だが、働く場所の確保も重要である。また、子育て支援対策の検証は難しいが、結婚支援を行うことで少子化の改善につながるため、婚姻数を増やす取組が必要である。丹波市では、たんばコインの利用が伸びているが、老若男女問わず地域の方が使用しやすいように取り組んできた結果であり、いかに人と人がつながっていくかが重要である。

委員：たんばコインという地域通貨を高校生が活用できるようになれば、人と人のつながりが増えるため、検討してほしい。

事務局：働く場所の確保について、工場も人が集まりにくいと聞いており、人の流れをつくる必要がある。結婚について、個人情報への取扱いも難しくなっており、おせっかいマスターも担い手が減っているが、結婚につながるよう課題として認識している。たんばコインについて、高校生に直接交付することは難しいが、デジタル化の取組として様々な角度から検討したい。

委員：第2期総合戦略の評価検証の35ページの「①若者、特に女性を転出させない取組と一旦転出したとしても、本市へ戻ってくる取組を強化」という表現は、かなりきつい表現であるため、誤解をまねかないやわらかい表現に改めた方が良く感じた。こどもは様々な才能を有しており、より多くの人と出会うことが重要であり、一度転出しても、また丹波市に戻ってくれば良いと考えている。私自身もこどものころから、地域とのつながりがあり、安心して育ててもらったと考えており、丹波市へ帰ってくるきっかけとなった。いかに大人が楽しそうにイキイキと生きているかメッセージとし

て伝えていくことが重要である。

委員：35 ページの表現については、「地域にとどまりたい」など表現を変更する必要がある。

先ほども触れたが、キーワードは「カッコいい大人」であり、丹波に志（こころざし）を果たし（貢献し）に戻りたいという若者を一度都会に出すという度量も必要である。

事務局：女性の回復率に危機感があったため、このような表現で記載しているが、修正したいと考えている。人と人のつながりを構築するため、基本目標 4 で掲げているが、魅力的な地域を形成し、その魅力を発信していきたい。

委員：ポストコロナで潮目が変わってきており、移住テラスの求められる役割も変化している。これまでは丹波市の魅力をわざわざ伝えなくても知られていたが、今は住宅や職場など条件が全てそろっていないと来てくれないため、20 代の女性を取り込みにいかなければならない。そのために、次の 4 パターンの方にアプローチしたいと考えている。①婚活サポートを活用している方、②能力が高い高度人材の方、③Uターンの方で、都会でも目的を果たした方、④20 代の方で、親世代が移住して楽しく住んでいる方。これらの人に選ばれるため、例えば「誰がどのような仕事をつくるのか」など事務局は戦略を持って計画を策定する必要がある。

委員：具体的な提案をいただいた。ご指摘のとおり、ポストコロナでアプローチを変えていく必要がある。もう少し戦略の練り上げを行う必要があり、言語化や図示を工夫して伝えていく必要がある。

4 次回推進委員会開催日程

第 2 回丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略推進委員会

日 時：令和 6 年 8 月頃予定

場 所：未定

5 閉 会